

ハワイ俳句のためのノート

松井貴子

ハワイのように日本とは異なる気候風土で俳句を作るときに問題となるのは季語の使用である。京都の気候を基準とする日本の伝統的な歳時記に従って、熱帯地方で俳句を作ることは難しい。日本人が日本語で俳句を作る海外詠でさえ、高濱虚子の「熱帯季題小論」に見られるように、一筋縄ではいかないと考えられていた。しかし、海外詠がまだ一般的ではなかった1970年代に、アメリカ人による英語のハワイ俳句集『ハワイの俳句』（註1）が、四季別に構成されて出版されていた。ハワイの冬の俳句も作られていたのである。冬という季節を熱帯地方で認識できるのか、どのように俳句に詠めるのか、考察するための準備としたい。

1 熱帯季題小論

昭和初期に、虚子は箱根丸で熱帯地方を經由して渡欧し、船上句会を行った。そして、その経験をもとに、「熱帯季題小論」を発表している。虚子は、熱帯という環境に身を置き、実感しながら、それを日本の季節感でとらえて俳句を作ろうとした。日本の伝統的な季節感を尊重し、保持することを前提としながら、新たに熱帯季題（熱帯地方の季語）を設定することを提言したのは、このときに生じた違和感の解消を模索した結果であろう。

季題はどこまでも動かすべからざるものとして置いて新たに夏の部に、熱帯といふ一部を設けて、その熱帯の天文、地文、地名、動物、植物、著名な行事等は、そのものが、暑い熱帯の季感を現すものとして季題となり得るといふことにしたらよからうと思ふ。（註2）

熱帯はすべて夏という季節認識である。熱帯以外の地に住む人間の感覚では、体感温度からして、夏以外の季節を感じることは難しい。熱帯の気候に対する繊細な感覚を持っていないからである。

内地の季題に準拠して、熱帯の花鳥諷詠をしようといふことは、概ね不可能のこ

とであつて、熱帯に住まつてゐる人々に取つては、非常な不便を感じずる訳である。ここに熱帯といふ一つの季題を確定することは、その不便を救ふばかりでなく、熱帯の俳人に限つて特に与えられた、別天地を諷詠し得る訳で、これからその俳句に、清新な写生句を求め得られるであらう。(註3)

日本の季節感をそのまま熱帯に適用することにはどうしても無理がある。もし、厳格に日本の歳時記に従つて熱帯地方で俳句を作ろうとするならば、実感を離れて観念的に俳句を作らざるを得ない。これは、正岡子規による俳句革新を経た近代俳句の方向性に反する。そこで、熱帯季題の創設を提案し、新たな俳句の可能性を期待しているのである。ここには、常に新しさを求める俳句の特性が現れている。

しかし、虚子は、熱帯季題から、さらに進んで、土地ごとに歳時記が作られることに対しては、懸念を抱いていた。俳人たちが互いに俳句作品を共有できなくなることを危惧していると思われる。

別に熱帯地方の歳時記を編むがよいといふ説もあるが、そんな風に地方地方で歳時記が出来たら俳句の統一がむづしくなる。(註4)

特定の地域の季節感をもとにした季語を定めることは可能である。しかし、各地の季語について相互理解ができていなければ、そのような季語を使った作品は活かされない。地域季語は、その地域以外の人々にも理解されるものでなければならぬのである。

そのためには、伝統的な日本の歳時記を基準として、それとの差異を記すか、その土地での季節認識の方針、原則を示すなど、新しい季語を共有できる可能性を探ることが不可欠である。

歳時記は和歌の伝統を引く俳句の季節感の集成である。季節感を表す季語は、生活実感を離れた知的な自然、季節を象徴する詩語として安定したイメージを獲得するが、これは一方では固定化のリスクを伴う。(註5)

そして、季語が、不変のルールとして扱われることになるのである。日本の季節感に基づいて成立した季語が外国で使われる場合でも、同様のことは起こり得

るであろう。

虚子は、日本の歳時記に準拠しながら、熱帯での実感を活かした俳句を創作する可能性を肯定していた。

熱帯地方の人だとして暑い句ばかり作らなければならぬことは無い。実際秋の感じが起れば秋の句を作り、冬の感じが起れば冬の句を作るがよい。(註6)

自分が手にしている歳時記に示された季節感を絶対視せず、慣れ親しんだ感覚にとらわれず、新たな実感を尊重しながら柔軟性を持って応用することができれば理想的である。

虚子は、熱帯の気候を次のようにとらえている。

熱帯地方には春夏秋冬があるのでありまして、其地方の人は少し涼しくなると流石冬だなど、言つてゐるさうです。熱帯地方の一月二月は冬なのでせうが併し其所に出かけて行つた内地人には矢張り暑い。丁度内地の夏にも涼しい日と暑い日とがある位の相違です。いくら涼しい日でも梅雨寒とか、夜の秋といった程度位なものだらうと思います。さういう地でありますからして常夏の国と呼ばれるのも当然であります。(註7)

熱帯地方の季節変化について、日本を基準としてとらえ、日本ほど変化が顕著ではなく、常夏であると認識している。現地の人々が四季の変化を鋭敏に感じ取っていることを耳にしながらも、自分の感覚の感覚とは異なる季節認識をそのままには受容できず、日本国内の季節感に対応させて理解しているのである。

内地を基本にして言へば熱帯地方のものは皆夏なので、熱帯地方の山川、動物、植物凡て夏の風物といふことになるのです。(註8)

日本を基準とするという意識を持つ限り、熱帯の季節変化は変化のないものとして看過されてしまう。熱帯を体感しているにもかかわらず、日本と異なる気候帯の季節変化を、それ自体として認識しようとしなないことは、これまで、日本の

俳人が日本の季節変化に対して繊細な感覚を磨いてきた伝統が活かされないことになる。

2 ハワイの気候風土

ハワイ俳句集が刊行される10年余り前にアメリカで刊行されたハワイの文化誌には、次のようなハワイの特徴が記されている。

島々が美しいことは、ハワイの芸術にたいへんな助けとなった。この点にも、土地が人々に及ぼす重要な影響が見られる。明るい空、穏やかにわか雨、山の形、その上に漂う雲、生命を与える海、これらは詩的な感情を呼び起す。このように美しい環境では、どんなに無味乾燥な人間でも詩人になりやすい。ハワイ人は本当に詩情にあふれていた。(註9)

温暖な気候で自然から一年中食料が供給されるハワイに住む人々は、自分の周りの環境に対する詩的能力に優れているという。これは、俳句創作にもつながるものである。

そして、気候風土の特徴については、次のように述べられている。

山があるので、人々は好きな気候を選ぶことができる。ハワイは普通、熱帯的であると思われやすい。なるほど島々は北回帰線のちょうど内側にある。もし、あなたが海面に近い高さの土地で暑すぎると思うならば—そんなことは、しばしばあるわけではない。というのは、心地よい微風がいつも吹いているから—山へドライブすればよいのである。山はいたる所にあるから、山上ドライブはめんどろなことでない。

たとえば、ホノルルの中心部から「マウカ」の方に自動車を走らせれば、数分のうちにタンタラス山(標高六一三メートル)の中腹へ登ることができる。高さ三〇〇メートルごとに、気温は二度くらい下がるから、日没後などは火が欲しいほどである。(註10)

ハワイでは、同じ日に場所を変えて、四季を感じるができる。日本の歳時

記に準拠しようとするならば、ハワイでは、土地の高度を変えて、日本の歳時記に対応する季節感を得ることができるのである。

常夏と言われるハワイでも、実際には、冬には高い山々（ハワイ島のマウナ・ロア山 4169 m、マウナ・ケア山 4205 m）に雪が降り積る。山の雪を運んで雪だるまができるほどである。冬のハワイにも、温帯の冬に通じる要素があり、日本の歳時記によって冬の句を作ることできる。

だから、決して、ハワイに季節の変化がないわけではない。季節変化の現れ方が異なっているのである。日本だけに四季の変化があるかのように思い込んでいる錯覚が、ハワイには四季がない、ハワイの季節に変化がないと感じさせているのかもしれない。

日本と同じような季節変化をしないことが、季節変化がないことにはならない。

季節を感じさせるものとしては、自然現象の他に、その季節に特徴的な生活様式や行事がある。

ハワイでは、日本人移民によって、正月、雛祭、端午の節句、盂蘭盆、盆踊りなどの行事が伝えられ、生活の中で継承されていた。（註 11）日本の行事は、太平洋戦争中に、一時途絶したが、戦後復活し、現在のハワイに定着した年中行事で、日本の歳時記と重なるのは、新年、雛祭、花祭、復活祭、クリスマスなどがある。他に、様々な催しが行われる桜祭、中国人が行う月祭があり、それぞれ、日本の花見、月見との類縁が感じられる。（註 12）

そして、クリスマスについては、その本質とハワイならではの特色について、特に、次のように説明されている。

ハワイのクリスマスは、世界中のあらゆるキリスト教地域と同じように、祝福と贈物をする日であり、家族そろって教会に行って礼拝をする日である。店のショーウィンドーは、クリスマス・ツリーや、ぴかぴか光る金銀の紙片や、綿の雪などで美しく飾られる。そしてデパートや商店街は、クリスマス用品を買う家族連れで混雑する。

公園には「クリスマスを楽しく」と書かれた立看板が立てられる。ハワイのサンタ・クロースは、そりやヘリコプターの代りに、カヌーに乗ってワイキキの浜辺に現れ、それによってクリスマスの幕が開かれる。何千本というクリスマス・

ツリーが、本土から運び込まれる。昔からのクリスマス・キャロルのメロディがそれぞれの店先から流され、クリスマス音楽のすぐれた演奏会も開かれる。

寒い気候の土地で育った人々にとっては、夏服でクリスマスを過したり、そのうえ水泳までできるといっても、ちょっとぴんとこないであろう。たしかにハワイは、世界中で唯一ともいふべき、夏服と花火でクリスマスを迎える所なのである。(註 13)

クリスマスのような季節的行事について、このように、国や気候風土が違って変わらない普遍的な事柄と、その土地に応じて生じる特徴的な事柄を弁別することは、クリスマス以外の行事、季節を感じさせるものに関しても有効であり、季節感、季節認識の本質を考える上で重要である。

1970年にホノルルで刊行された日本語による『ハワイ歳時記』には、**Hawaii Poem Calendar** という英語のタイトルが付されている。この歳時記は、単なる季語集、例句集ではなく、生活の中の暦という認識で編纂されていることがうかがわれる。(註 14)

この歳時記では、ハワイの気候を考慮しながら、1～4月を春、5～8月を夏、9～11月を秋、12月を冬と区分して四季を設定し、新年と雑を加えている。ハワイは日本より冬の訪れが遅く、冬の終わりが早い。(註 15)

『ハワイ歳時記』の冬の季語は、日本の冬に重なる冬らしさ（三山の雪、風邪、暖房、クリスマス、忘年会）とハワイの冬に特徴的に表れる季節変化（雨期に入る、コナ嵐、水余る、三山の雪、冬みどりなど）の両方が見られる。

3 アメリカでの俳句

日本の俳句は、1960年代にアメリカの小学校の教科書に採用され始めた。俳句は、多くは英語の17音節に翻訳され、行末の韻を踏まないのので、小学生でも作れる「無韻の十七音節の三行の詩」として、英語の音節を教える教材として使われた。(註 16)

1970年代に刊行された教科書では、俳句の特徴が次のように説明されているという。

○ **HAIKU** に韻はありません。

○それぞれの詩はイメージあるいは印象を表します。

○題材は自然で、しばしば季節的なものです。

○それぞれの詩は三行です。

○各行は五・七・五です。(註 17)

また、同じ年代に刊行された参考書には、「非常に短い詩を書くことは、三本か四本の線だけで絵を描くのと似ている。もし正しい線すなわち言葉を選べば、非常に愉快的な、そして奇妙な効果をあげる詩を書くことができる。」と、日本の俳句と絵画の類似性、表現効果としての意外性に着目する記述があるという。(註 18)

日本の俳句は、アメリカの教科書に採用されて知られるようになり、1967年には、ハロルド・G・ヘンダースンによる英語俳書『英語俳句』(註 19)が出版された。日本の伝統的な俳句について知った上で、英語俳句をどのように創作し鑑賞するかを模索することを目的としている。

ヘンダースンは、俳句の有季定型について、5-7-5の17音であること、人事以外の自然現象への言及を含むことと説明し、加えて、俳句は、一般論ではなく、現前する特定の事柄を詠むものであると定義している。(註 20)

日本語の定型を英語にそのまま適用することはできないため、5-7-5にこだわらないで3行に書かれることが多い。しかし、それが最善の詩形とされているわけではなく、英語にふさわしい詩形を模索中であるという。(註 21) また、日本語の切字は、コロムやピリオド、点の連なりで表現している。(註 22) そして、英詩では韻を踏むが、俳句で韻を踏むことは、作品にこめられた感動を読者に伝えるにくくするとされている。(註 23)

アメリカの俳人には、季節感や季語が日本では俳句に不可欠なものであるということが認識されているが、それを遵守する人と、しない人がいて、大多数の俳人は季語に関する知識を持っていない。気候風土の異なるアメリカで日本の季語を使うことが実用的ではないこと、季語は人が規定したものであるため、俳句が自然を離れた人為的なものになってしまうと考えられたことが理由である。

それでも、ヘンダースンは、アメリカ俳人は季語に対してあまりにも無関心であると述べている。(註 24) そして、アメリカの俳壇で、俳句をどのように作るか、まだ合意ができていないなかで、自然を詠み、特定のできごとを通して感動を伝えるのが俳句であり、日本の俳句の約束事を適用することは有用なこともあ

ると提言している。(註 25) 俳句において季語は重要なものであり、感動を伝えるための描写が視覚的であることを俳句の条件としている。(註 26)

4 ハワイの冬の俳句

『ハワイの俳句』の作者アネット・シェファー・モローは、テキサス生まれのドイツ系アメリカ人で、8才の頃から詩を作っていた。コピーライターを10年やった後、ハワイに4年間住み、日系人二世のものの見方を取り入れて、ハワイ俳句を作ったという。テキサス出身のモローは、ハワイでの自分をよそ者と位置づけながら、ハワイの様々な場所や季節ごとの諸相を読者に提示している。自分にとって異質の風土を非西洋のスタイルで詩に詠み、詩の普遍性、人間の同一性が読者に伝わることを期待している。(註 27) 子どものときからの詩作と短いフレーズで端的にメッセージを伝えるコピーライターという職業経験が、同じく少ない言葉で感動や発見、世界観や人生観を伝える俳句創作に挑戦することにつながったのであろう。

『ハワイの俳句』の冬の部(註 28)には21句収録されている。本土とは異なるハワイでは容易ではなかったであろうことが推測されるが、彼女にとっての冬を感じさせるものを探して俳句を作っている。

ハワイの冬の特徴である雨季の湿った風と雨、雨によって生き返った植物の緑色、葉を落とした木々、暖かさを感じさせない寒さなどが季節感として詠まれている。これらは、気候風土に即して体感的に感じ取った冬である。

日本の伝統的な季語に通じる季節感、季節認識に加えて、サーフィンができるハワイの高い波頭の白さに冬を感じているのは、雪の白さからの連想であるのかもしれない。他に、自然現象を離れて、自分の孤独感や夏を想う気持ちを、心象的に感じ取った冬として句に詠みこんでいるという特徴が見られる。

註

註1 Morrow, Annette Schaefer. *Haiku of Hawaii*. Rutland & Tokyo: Charles E. Tuttle Company. 1970

註2 高浜虚子「熱帯季題小論(上)一箱根丸から一」『東京日日新聞』1936・4・14日、『定本 高濱虚子全集』第11巻 1974・4 毎日新聞社 307 - 308頁

- 註3 高浜虚子「熱帯季題小論（下）一箱根丸から一」『東京日日新聞』1936・4・15日、『定本 高濱虚子全集』第11巻309頁
- 註4 高浜虚子「熱帯季題小論補遺」『ホトトギス』1936・9、『定本 高濱虚子全集』第11巻312頁
- 註5 宮坂静生 岩波新書1214『季語の誕生』2009・10 岩波書店
- 註6 高浜虚子「熱帯季題小論補遺」312頁
- 註7 高浜虚子「熱帯季題小論補遺」311頁
- 註8 高浜虚子「熱帯季題小論補遺」311頁
- 註9 『文化誌 世界の国24 ハワイ・太平洋諸島』1973・5 講談社 118頁（原著は、Smith, Bradford. *The Land and People of Hawaii*. Philadelphia: J. B. Lippincott Company. 1957）
- 註10 『文化誌 世界の国24 ハワイ・太平洋諸島』94 - 95頁
- 註11 『文化誌 世界の国24 ハワイ・太平洋諸島』157 - 158頁
- 註12 『文化誌 世界の国24 ハワイ・太平洋諸島』161 - 164頁
- 註13 『文化誌 世界の国24 ハワイ・太平洋諸島』164頁
- 註14 元山三代松（玉菘）編『ハワイ歳時記』Hawaii Poem Calendar 1970・9 博文堂（ホノルル）
- 註15 日本の歳時記では、2月初めの立春、5月初めの立夏、8月初めの立秋、11月初めの立冬で四季の区分がなされ、1月前半を新年とし、通常、雑の部はない。
- 註16 佐藤和夫「アメリカの小学校読本に現れた俳句」『俳句文学館紀要』2号 1982・9 俳人協会 207 - 230頁
- 註17 佐藤和夫「アメリカの小学校読本に現れた俳句」220頁
- 註18 佐藤和夫「アメリカの小学校読本に現れた俳句」228頁
- 註19 Henderson, Harold G.. *Haiku in English*. Rutland & Tokyo: Charles E. Tuttle Company. 1967
- 註20 Henderson, Harold G.. *Haiku in English*. p.14.
- 註21 Henderson, Harold G.. *Haiku in English*. p.32.
- 註22 Henderson, Harold G.. *Haiku in English*. p.33.
- 註23 Henderson, Harold G.. *Haiku in English*. p.35.

註 24 Henderson, Harold G.. *Haiku in English*. pp.35-39.

註 25 Henderson, Harold G.. *Haiku in English*. p.42.

註 26 Henderson, Harold G.. *Haiku in English*. p.73.

註 27 Morrow, Annette Schaefer. *Haiku of Hawaii*. pp7-9.

註 28 Morrow, Annette Schaefer. *Haiku of Hawaii*. pp45-52.

本研究は、平成 21 年度科学研究費補助金（基盤研究 C）「季節感、季節認識に関する比較文化研究－俳句の国際化を視座として」による成果である。